相模経済新聞　2019年5月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ 13

北里環境科学センター理事長／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

お札になる柴三郎

新緑が眩しく萌える中で、新時代「令和」がゆっくりと走り始めた。我々は、新時代にどんな文明を創ることができるだろうか。

「宇宙生命哲学」の本旨は、宇宙から地球を眺めることにより、この惑星の上で展開する生命現象を総合的に考察し、新しい文明を創造することである。

今から100年も前に、宇宙から俯瞰的に人間社会を観察し、生活環境の重要性を医療現場に提言した医学者がいた。それは、新千円札の肖像になる北里柴三郎である。

柴三郎は、1853年に九州・熊本の小国町に生まれ、青雲の志を抱いて医学の道に進み、東京医学校（現・東京大学医学部）を卒業後、ドイツのロベルト・コッホ研究所へ留学した。それまで世界の医学会で不可能とされていた破傷風菌の純粋培養に成功し、さらに破傷風毒素に対する血清療法を開発した。この血清療法は、第一回ノーベル生理学・医学賞の対象となったが、共同研究者のベーリング博士だけがノーベル賞を受賞し、柴三郎は選に漏れた。ノーベル賞は、当初1領域1人の受賞と決まっていたようである。

柴三郎の業績は、世界で高く評価され、多くの先進国から破格の条件で招請された。当時の日本は、長い鎖国政策の後、唐突に開国したために、海外からの病原菌の侵入に対して無防備であった。柴三郎は、海外の伝染病の猛威を目の当たりにして、祖国を伝染病の脅威から守るために、任務が終わり次第帰国することを決断した。

柴三郎と嫌気培養装置

帰国後は、まず生活環境の整備に心を砕き、上水環境、下水環境を分断し、病原菌の媒介者であるねずみの駆除を徹底し、私立伝染病研究所（後に国立となる）の創設に奔走し、公衆衛生学など、予防医学の発展にも務めた。

柴三郎は、福沢諭吉に様々な場面で支援を受け、北里研究所が創立され、自ら創設したこれらの研究所では所長として多くの業績を上げるとともに、野口英世、志賀潔、北島太一、秦佐八郎などの高名な医学者を育てた。柴三郎の没後、弟子たちは北里研究所創立50周年を記念して、1962年に北里大学を創立し、2006年には研究所と大学が統合され、学校法人北里研究所となって、柴三郎の遺志は現在にも引き継がれている。2015年には、北里研究所で花開いた大村智博士の研究が、ノーベル生理学・医学賞に輝き、北里研究所にとって100年越しの夢が叶うこととなった。